

# 精神的世界と学の形成の諸問題 (12)

——統一科学について——

峰 島 旭 雄

## 1

これまで「精神的世界と学の形成」についてさまざまな角度から検討してきたのであるが、ここでは、そのような学が例えば哲学、美学、倫理学、宗教（哲）学等々として分割されて成立している事態に鑑み、はたしてそれらは個々別々なものなのか、あるいは相互関連においてあるか、さらには、それらは統一的ななんらかの仕方で統合をされているか、統合されうるか、というような問題に対して、若干の考察を試みることにしたい。

精神的世界は、しばしば触れたように、〈精神〉という一つの形態によって浸透されている世界である。そのような一つの形態がさまざまな視野から切り取られ、その一つ一つごとに学の形成がおこなわれて、前掲のごとく哲学、美学、倫理学、宗教（哲）学等のジャンルが成立することになる。しかし、もどが一つであるからには、それらの諸学もまたなんらかの関連においてあるでなければならぬだろう。じじつ、一、二にとどまらず、〈統一科学〉というような思想＝学問運動がこれまでにあった。アメリカでは、科学哲学・分析哲学の領域で、この〈統一科学〉(unified science)の動向があった<sup>(1)</sup>。科学哲学や分析哲学の場合、理念的なもの、理想的なものといったおよそ価値にかか

わる事柄に対しては、少なくともその初期においては無関心であり、あるいは否定的でさえあったのであるが、次第に単に〈存在〉のみならず〈価値〉の領域へも関心を示し、あるいは示さざるをえなくなり、そのような傾向がこの統一科学運動を引き起こしたのかもしれない。なぜなら統一科学というとき、それは個々の現に成立している個別科学のことではなく、それらを統合した一つの理念的なあり方を意味すると考えられるからである。いいかえれば、統一科学というのは一つの理念であって、現にそのようなものはありえないものなのである。

ここに、諸学における現実態と理念態ともいうべき問題が見出される。学問（科学）は現実には諸学（諸科学）として個別的に存立しているが、同時にそれらは理念態として一つの統合をめざしているとみなされるのである。近時、とりわけ自然科学の領域で、学問（科学）の領域の細分化が、つまり専門化がいちじるしい。例えば、医学の場合、内科学と外科学というような大きな分け方ではなく、その中の心臓外科というような、心臓のみを専門とする領域があり、さらにその中がまた細分化・専門化されているのである。したがって、「獵師獲物を追って山を見ず」といわれるように、心臓外科的な、さらにそのまた部分的な専門領域についてはベテランであるけれども、そのことが他の身体の部分とどうかかわるか、まして身体全体、いな人間全体（それには精神の領域が含まれる）とどうかかわるかについては、無関心であり、無関係である、というような傾向が生じているといわれる。西洋医学がとりわけそうなのだということでもある。これに対して、東洋医学は身体、それらの各部分を連繋させて治療することをめざす点において、西洋医学の欠を補うものがあるといわれる。ところで、最近、西洋医学と東洋医学とに対していわば第三の医学が現れている。それは部分的である西洋医学と、部分関連的である東洋医学とを（それらを否定するのではなくベースに捉えながら）いわばアウフヘーベン（aufheben 止揚）しようとするホリスティック（全体的）な医学であるという。具体的には、たと

えばイメージ療法といって、ガン（末期）患者に対してコバルト療法のみを試みるのではなく、「よくなる」というイメージをビデオなどを活用して与えることによって、患者自身の全身体的（つまりは精神的）な向上心、生きんとする意志を喚起させる療法などである。データの示すところによると、イメージ療法を試みた患者においては、そうでない患者に比べて、2～3週間、1ヶ月のあいだに、ガンの兆候がかなり減ってくるという。つまり、人の生きんとする意志、精神的なもの、あるいは全人格的なものが、身体的なもの、病的なものを包み、乗り越えるのである。

この事例によっても分かるように、まずもって、学問（科学）は細分化・専門化のあげくのはてに、再統合へと向かうものであることが認められよう。これまで「精神的世界と学の形成」の問題を扱うのに、はじめは〈学の形成〉、つまり主観の側、学的認識の側に重点を置き、やがて客観の側、〈精神的世界〉そのものも取り上げた。ここでも、まず学問（科学）の細分化・専門化が問題とされ、ついでその統合が問題とされたのであって、これに対しては、再び主・客両面の再統合としての全人的なレベルでの追究が求められるべきである。

## 2

いまイメージを取り上げたが、K・ボウルディングは『ザ・イメージ』において、イメージをもって諸科学の統合をはかろうとした。このことについては、他の機会にすでに触れたが<sup>(2)</sup>、奇しくも、前述のごときイメージによってホリスティックな全人的治療をおこなうことと、ボウルディングのイメージ統合論とが符号する面のあることは、否定できないであろう。

ところで、またかなり異なる視点から、諸学（科学）の統合を試みようとした例である。故滝沢克巳は、カール・バルトの影響を受け、ものごとをラジカルに究明し、西田哲学批判もおこない、実践的にも活動した。滝沢が1984年5月22日ドイツ語で第1回草稿を書き上げた「神学と人間学——一つの矛盾——

「(純粹神人学草稿)」(Theologie und Anthropologie—ein Widerspruch? Entwurf einer reinen The-anthropologie) という論考がある<sup>(3)</sup>。これもまた一つの諸学(科学)の試みであるとみなすことができる。

〈神人学〉という表現はやや奇異な感をあたえないでもない。それは在来の神学と人間学とを批判することを通して、滝沢独自の統合学の理念を打ち出したものであるということができる。

まずフォイエルバッハの人間学が取り上げられる。フォイエルバッハは、周知のごとく、「神学の秘密は人間学である」として、神学を人間学へと還元した。滝沢によれば、フォイエルバッハは、人間における聖なるものを、あらゆる人間の善悪に先立つ人間の事実存在のうちに見出した。それはその限りで正しい。したがって、通俗的神学がフォイエルバッハを批判し、神学を解体したように言うのは間違っている。むしろ滝沢は、フォイエルバッハは「イエスの近く立っている」とする<sup>(4)</sup>。しかし、フォイエルバッハはこの〈事実存在〉が「唯一の聖なる神人の結合」にもとづきこれに照応していることを見過ごしてしまった。フォイエルバッハはイエスの近く立っていながら、イエスがすべての人間をその善悪を越えて端的な・天の父と不可分に結合した存在そのものにおいて見ており兄弟として愛したことを、見過ごした。かかる唯一の聖なる神人の結合はすべての人間の活動に絶対的に先立つものであり、「これからして、これに向かってのみ、事実に存在するそれぞれの人間は、人間として真に健康に、創造的に、あらゆる他の物体や人間と共に、生きることができる」のである<sup>(5)</sup>。人間をこのような意味での〈事実存在〉と見ないフォイエルバッハには、罪や死の問題は痛切な問題とならなかった。

カール・バルトは、このような意味での人間の事実存在、聖なる神人の統合を、〈インマヌエルの原事実〉と呼んだ。それは根源的出来事(根源的歴史)であり、これなしにはこの世界において何事も生起しない<sup>(6)</sup>。それは〈太初之言〉(「はじめに言葉ありき」ヨハネ伝1—1)である。滝沢のこのような視座から

すれば、諸学（科学）の事実も、学的認識も、その対象としての全人も、この〈太初之言〉なしには生起しえないといわなければならない。

しかしまた、滝沢は人間学に対する、在来の神学をよしとしているのでもない。かれは聖書やナザレのイエスをも含めて一切の歴史内的・史的形態による囚われを排除する。カール・バルトは〈インマヌエルの原事実〉に依ることによって、このような囚われから自由となった。しかし、そのバルトにしてなお、〈インマヌエルの原事実〉もナザレのイエスという特別な形態の成立によって、すなわち一つの歴史内的・史的出来事によって、事実的となったと考えている。滝沢は、これをもって、バルトになお「宗教的ないし哲学的な思想の断片が残っている」しるしと見る<sup>(7)</sup>。このような考え方は、聖書やナザレのイエスによって窒息させられ束縛されている結果である。〈インマヌエルの原事実〉はこのように歴史内的・史的出来事によってはじめて生起するのでなく、「はじめにかつ永遠に、真の、絶対的に形無き神ご自身によってかたく創られた」という<sup>(8)</sup>。したがって、ナザレのイエスの出現と共に決定的に起こっていることは、唯一の〈インマヌエルの原事実〉の呼びかけに対する完全な、しかし徹頭徹尾人間的な答えなのである。

滝沢のこの考えは、ふつう神学でいわれるような、聖書に学びイエス・キリストを信じ、といったパターン化した信仰形態を、無の深淵へと突破する底のものであるといえることができる。滝沢のいう神人学とは、前述のごとき意味においての神への人間の応答であるといえようが、さらに〈純粹〉という語を冠して、〈純粹神人学〉というのはなぜか。〈純粹〉とは、おそらく在来の神学の枠組みを脱却し、滝沢のいおうとする自由にして創造的なホリゾンにおいてあらたに神学を見据えることではなかろうか。

「純粹な神人学は偶然的・一回的に与えられたナザレのイエスもしくは聖書という形態に助けられ導かれはするが、しかし束縛されはしない。むしろ、生ける道標としてのこの形態に導かれて、もっぱら道、真理、太初ロゴスに向

かう」のであるといわれる<sup>(9)</sup>。すでに引照された〈太初のロゴス〉がバルトのいう〈インマヌエルの原事実〉を指すものと解される。おそらく滝沢は、「はじめにロゴスありき」というヨハネ伝冒頭の言葉を、いわゆる神学的に固定するのではなく、最も根源的に捉え直そうとするのではなかろうか。〈神学的に思惟する〉(theologisches Denken)とはバルトの態度でもあるのだが、滝沢はいわば〈純粹に(＝根源的に)神学的に思惟する〉ことを試み、これを〈純粹に神人学的に考える<sup>(10)</sup>〉と言い表すのである。詳しくは、人間は自己自身を一つの存在者として知っているが、この存在者は一方では、絶対的に偶然的であり、あらゆる歴史的形態を持った規定から自由であり、他方ではしかし、何よりもまず、そのようなもろもろの規定とは比較にならないほど厳しい、唯一の神の規定、すなわち人間は、まさしくははじめから終わりまで、このような偶然的な存在者として自己自身の生涯において生ける神自身を表現すべきであるという、唯一の神の規定、の下に立っている。人間は、自己自身が完全に罪人であるということ、生きることにしても思惟することにおいても、いつも繰り返し誤りを犯すということをも、感じている。このような状況において人間の〈純粹に神人学的に考える〉ということが生起するのである。

かくして滝沢は端的に〈純粹神人学〉なるものを、次のように規定する。「わたしのいう純粹神人学は、インマヌエルなる神の太初の言への純粹なエコーである<sup>(11)</sup>。」このような根本規定を前提として、滝沢は、純粹神人学に関連して、いくつかの注目すべき提言ないし示唆を与えている。まず、聖書やナザレのイエスによって窒息させられ束縛されている通俗的神学、在来の神学においては、他の諸宗教や人々や事物との真の対話ははじめから除外されている、としている点を、挙げなければならない。これを逆にいえば、滝沢のいう〈インマヌエルの原事実〉に立ち、〈太初のロゴス〉にもとずくのであれば、他の諸宗教や人々や事物との真の対話が可能となることを期待できる、と言わなければならない。ここに、比較思想・比較哲学・比較宗教の根源的な一つのあり

方を見ることはできないだろうか。

それと関連して次の点もまた注目されよう。やや長いが著者自身の言葉を引用したい。

さらに純粹神人学は——それがこのようにまったく独特の仕方では人間存在にかかわることによって——すでにそれを越えて、物一般の存在にかかわる。なぜなら神人学が明白に見ることは、人間はたしかに自由な主体ではあるが、しかし決して本来的な、真にそれ自体で存在するような主体ではなく、反対にただ、真の主体であるインマヌエルなる神の単なる対象・物体にすぎない、ということだからである。すなわち、人間は自分自身からは何ものも、事実に存在も、根源的・本質的な規定も持っているのではない。はじめから、各瞬間ごとに、人間は端的にそのように決定されているのであって、それは人間がそれを肯定するとか否定するとか、または何かを決断して選択するとかいう以前に、そうなのである。ここにおいては、人間が他の生物やまた他の生命のない物体よりもより高い、などということは決してない。人間は何かを選んだり創り出すよりも以前に、道ばたの石と同じように端的にそこに存在する。そして一度存在すると、人間としての仕方であるまわらないことはできない。それはちょうど草が、種子が一度まかれると、自分で根をはり芽を出すのと同じである。相違はただ、どのようにして自己自身や他の物や他の人間にかかわるのかという、根源的・本質的に規定されたあり方の内に存する。換言すれば、単純に有限で、それ自身ではとうてい生命のない一個の物体が、もしくは、人間自身そうでありかつあり続けるところの最も本来的な意味での物が、どの程度、どの段階において主体化されているのか、ということに存する。(上点原文)<sup>12)</sup>

ここでは、人間が他の無機・有機物に対して優越するのではなく、かえって〈物一般〉の存在の根源性が説かれているともみなされよう。人間にせよ、物にせよ、まずもって「真の主体であるインマヌエルなる神の単なる対象・物体にすぎない<sup>13)</sup>」のであり、人間という事実に存在も、まして人間に特有な自由存在も、みずから設定しているわけではなく、「人間は……道ばたの石と同じ

ように端的にそこに存在する<sup>14)</sup>」のであり、「各瞬間ごとに、人間は端的にそのように決定されている<sup>15)</sup>」のであるという。かえって、「最も本来的な意味での物<sup>16)</sup>」がなんらかの段階でどの程度に主体化されているかによって、人間自身がそれであり、かつ、それであり続ける事実的存在なるものが決定される（むしろ決定されている）のである。このような一種の根源〈物〉性とその主体化の考えは、滝沢が〈創造的進化〉と呼ぶものであると考えられる。このことから、「人間が他の生物やまた他の生命のない物体よりもより高い、などということとは決してない<sup>17)</sup>」という結論が導かれてくるのである。これは、ある意味で、仏教的な考えに通ずるものであるかもしれない。

また、根源的な事実として、人間が罪人であるということを据えるがゆえに、人間が思惟するさい、誤謬におちいる可能性が十分にあるという点にも<sup>18)</sup>、注目したい。科学は普通妥当な真理を要求し、またそれをすでに所有しているとさえ一部では自負しているかにみえる。しかし、いま述べたような滝沢の考えに従えば、科学無謬のありえないことは、教皇無謬のありえないことと同様、明白なのである。

以上のような基本的な考えをたずさえて、滝沢は、やや具体的にこの〈純粹神人学〉の構想に入っていく（絶筆であるがゆえに、あとさらなる詳述を期待しえないことが残念である。）

「純粹神人学そのものは、歴史的・社会的研究のための真に科学的な方法<sup>19)</sup>」であるという。その理由は、神人学がすべての物的形態（人間を含む）の認識に現実の根拠と真の意味を与えるからである。滝沢は、そのことが最も顕著に現れるのは宗教学においてであるという。なぜなら、「すべての物的形態の中で、人間が最も複雑で微妙な形態である。しかも、宗教はあらゆる人間の現象の中で最も捕らえがたい現象である<sup>20)</sup>」からである。そうであれば、宗教現象を徹底的に客観的、科学的に研究するべく神人学が手助けすれば、宗教学においてまずもって学的認識の現実の根拠と真の意味が与えられるであら



うからである。このことを敷衍していけば、経済学、政治学、心理学、社会学、教育学、医学等のあらゆる人間的・歴史的現象に関する諸学（科学）に対して、方法論的な手助けとなりうると考えられるという。

このような滝沢の構想の中でとりわけ注目すべきは、次の二点であろう。第一には、諸学の根底に、方法論的視座からして、神人学という在来の神学にあらず、哲学にあらず、それらを突破し乗り越えたある種の根源学ともいべきものを設定したことである。第二に、それに伴って、宗教学に大きなウェイトを置いたということである。その説明によれば、宗教学は人間存在の最もデリケートなところを取り扱う学、つまりは諸学の中の究極の学であるから、というのである。これら二点について、すなわち、方法論的考究の重要性と根源学の設定ということ、宗教（哲）学の究極性ということは、われわれの試みようとする諸学（科学）の統合に対して、資するところがあるであろう。

そして最後に、滝沢がこのコンテキストで述べている二つの印象深い言葉を引用しよう。

(1) 「神学的研究は実際は徹底的に人間の事柄なのである。」

(2) 「純粹神人学はあらゆる経験科学の方法の心なのである。」(上点筆者)<sup>20)</sup>

現在、理論物理学の領域において、〈宇宙論〉なるものがかまびすしい。宇宙の発端とその行方などがむしろ哲学的な色彩を帯びて論議され、〈ホーキング現象〉などというフレイズまで造られるにいたっている。そのような分野において、意外にも、すべての物理法則、あるいは宇宙法則は〈人間原理〉であるという考えが披瀝されている。現在学的に承認されている諸法則はすべてこの宇宙、この銀河体系の中でのことで、しよせん人間のつくり出した法則であるがゆえに人間にとって普遍妥当的な力をもつ、とでも言い表せるであろう。これまで科学的研究は人間の事柄ではない、少なくとも人間の主観や心を離れて、いわゆる客観的に、その意味で精密に、おこなわれねばならないとされているのである。しかし、いま触れた人間原理そのことではないが、たしかに、

科学的研究にも人間的なものが、結局は、究極的に人間的なものが、その背景にひそまないとは断定できないのではないだろうか。

このことは、ただちに第二の「純粹神人学はあらゆる経験科学の方法の心」ということに関連する。方法の心とは方法の核心であり、方法を深みにおいて支える根源的なものという意味であるだろう。神人学が経験科学を、すなわち、ある種の根源学が諸学（科学）を支えているのである。例えば、フィヒテは実践的なものを全哲学の基礎（かれの表現でいえば全知識学の基礎）に据え、シェリングは芸術的なものを哲学の根源に見据え、ヘーゲルは絶対精神というロゴスを弁証法的に展開する全哲学体系の根底に見た。近時、カントの超越論哲学の根源に宗教的なものを見て取ろうとする試みもある。（ビヒラー、量義治ほか）ハイデガーのカント解釈では、構想力（想像力＝イマジネーション）が根源力であり、少なくとも第一批判である理論理性批判の根源となっているとされる。（それはさらに第二批判＝実践哲学、第三批判＝美学・目的論にまで拡大されて考えられる可能性を蔵している）

ただこれらの事例では、根源的なものが哲学体系の基礎になっているのであって、ただちに経験的なもの、経験科学の基礎となっているのではない。この点について、滝沢の構図はどうなっているのだろうか。

### 3

滝沢は、経験科学、哲学、神人学の相互の関係を次のように見ているとおもわれる。経験科学は現実的なものを扱い、哲学は本質的なものを扱い、両者は相補的、相互補完的である。これに対して、それらの根源として神人学がある、と。したがって、通常考えられるように、神人学→哲学→経験科学なのではない。それゆえにこそ滝沢においては、神人学と経験科学とがタイトルに関連づけられうるのである。「純粹神人学はあらゆる経験科学の方法の心なのである」という言葉からは、そのようなことが汲み取れるのである。このような構図は、

たしかに、統一科学、諸学（科学）の統合を考える場合、示唆的である。

しかし、滝沢はなにゆえ、経験科学と哲学とを相補的に考え、いわばその上に、あるいはその深みに、神人学を据えようとするのであろうか。すでに見たように、人間は罪人であって、思惟することも誤謬なきことを保ちがたい。したがって、人間のわざであり相補的である経験科学と哲学とを、さらに神人学が根本的に補わなければならないのではなかろうか。そこには、あくまでも、キリスト教批判、在来の神学批判がありながら、やはり、なんといっても、キリスト教の土壌を考えずには成立しない学問論があることを、指摘せざるをえないのである。もしかりに仏教の土壌においてほぼ同様のことを見るとするならば、一つの可能性は〈即の論理〉であるということができよう。この場合は、〈上〉ないし〈深み〉に神人学的なものを設定せず、経験科学と哲学、いずれにせよ、現象即実在という観点からして、相補的というよりは相即的に関連づけられ、そこに由来する学問論は、また別個の様相を呈することも考えられる。

冒頭に挙げた科学哲学・分析哲学の立場からする統一科学運動は、これまで述べてきた境位からすると、いまだ表層における統合にとどまるかとおもわれる。現在の世界の状況を背景にしてみると、往々にして表層における統合とか比較とかがおこなわれている可能性がある。このさい、われわれは、根源へもどって、諸学（科学）の統合を考える必要があるだろう。その場合、くりかえし指摘してきたように、問題点は、主観と客観、外（表）層と内（深）層とのかかり具合である。統合が客観・外（表）層にとどまる場合、真の意味での再統合は困難となるのではあるまいか。

小論においては、精神的な世界における学形成に関して、精神的諸学（科学）の統合ないし統一科学という問題を、ごく序論的に論じるにとどまった。

- 注(1) ノイラート (Otto Neurath 1882-1945) はきわめて広範囲な学問分野に関心をもち、経済学・社会学・政治学・科学史・科学方法論等の諸領域にわたって研究成果を挙げ、一種の百科全書運動として〈統一科学〉運動を提唱し、「国際統一科学エンサイクロペディ」(International Encyclopedia of Unified Science) 刊行を開始した。(ただ最初の2巻のみで終わった) かれは科学哲学・分析哲学者として、ウィーン学団の指導者の一人でもあった。
- (2) 拙稿「統一科学の理念と現実——一つの序説——」創設45周年記念論文集『アジア学への視角』早稲田大学社会科学研究所刊, 1985, pp. 3~28. 「統一科学と比較哲学」峰島旭雄編著『比較思想の世界』北樹出版, 1987, pp. 11~21.
- (3) 滝沢克巳『純粹神人学序説——物と人と——』創言社, 1989年, 265~304頁 (これは滝沢克巳の論文集であるが、本論文で取り上げる「神学と人間学」の部分は寺園喜基氏によるドイツ語原文からの翻訳である。なお pp. 304~290にはドイツ語原文も取められている。
- (4) 滝沢克巳, 前掲書, 267頁。
- (5) 同頁。
- (6) 同 268頁。
- (7) 同 269頁。
- (8) 同 271頁。
- (9) 同 272頁。
- (10) 同 273頁。
- (11) 同 275頁。
- (12) 同 276~7頁。
- (13) 同 276頁。
- (14) 同頁。
- (15) 同頁。
- (16) 同 277頁。
- (17) 同 276頁。
- (18) 同 273頁。
- (19) 同 286頁。
- (20) 同頁。
- (21) 同 287頁。